

## 論文

# 高校時代に受けた進路指導と その後の進路決定について

伊 東 孝 郎

Effects of Career Guidance in High School on the Choice of Career

ITO Takao

### 1. はじめに

大学進学率が今のように高くはない時代、中等教育における進路指導が職業指導を意味し、実際にそう呼ばれていた1951年に、「学校の行う就職指導」において初の翻訳でない定義が出された。「職業指導とは、生徒の個人資料、進学・就職情報、啓発的経験、相談、あっせん、補導などの機能を通して、生徒が自ら将来の進路を計画し、進学・就職して、更にその後の生活によりよく適応し、進歩するように、教師が教育の一環として援助する過程である」。この定義を原型として、1955年の「中学校・高等学校職業指導の手びき—管理運営編」の中で仮案としての定義が示され、その後、進路指導という呼称が一般的になっていく間に「仮案」の字が抜け落ちて、こうした「生徒の将来展望に基づく進路の自己決定を可能にするための指導」という定義が定着したのだという。(藤本、1987、藤田、2001) 呼称の変化はあったものの、進路指導に関する定義は戦後一貫して、

同じ理念を保持しているわけである。

しかし実際の教育現場に、こうした進路指導に関する理念が十分伝わっていたかという点、はなはだ疑問であり、とりわけ高等学校においては、偏差値重視と高い大学進学率に引きずられる形で、進路指導とは、生徒をできるだけ偏差値の高い大学に入学させるためのテクニカルな指導を意味するもの、という誤解が広がっている。実際こうした指導が功を奏し、大学で学びたい分野や卒業後に就きたい進路とは無関係に、ただただ偏差値の高い大学に進学を果たすことで満足してしまう生徒や保護者、あるいは高等学校関係者がいる。しかし、こうした生徒たちが大学に進学した後、学業に満足し、卒業後自分に合った進路を選択できるか、ということについては、直接それを示してくれる十分な資料はないものの、「2004年版労働経済の分析」で64万人いるとされるニート（若年無業者）や、213万人と推計されているフリーターの急増ぶりをみれば、否定的にならざるを得ない。

しかし一方で、先に挙げた高い理念を体現するかのように、進路について早い時点から明確に意識し、自らの生涯にわたる進路を計画して、そこから逆算する形で大学選びをする生徒も、少なからずいる。筆者が行った調査（2005）によれば、幼児教育科にいる短期大学生の多くは、小学校以前という回答を含む早期の段階で将来の職業を決めた上で、短大進学を果たしていた。また高校時代に受けた進路指導の内容のうち、短大卒業後の進路決定に役立った割合の高かったものは「就業体験／インターンシップ」であり、以下「職場見学」「ボランティア活動」の順となったが、これらはいずれも、筆者が〈体験型進路指導〉と名づけたプログラムであった。

今回、本学で新たに教育・保育系の新学部である発達科学部が発足したのを機に、その1年生及び他学部の学生を対象に、前述の短期大学生に実施したのと同種の調査を行った。内容は、高校時代に受けた進路指導を振り返ってもらうとともに、そうした指導が、大学進学や大学卒業後の進路決定に与えた影響について調べるための、質問紙調査である。

## 2. 調査方法

調査は質問紙調査法で、2004年11月の講義時間中に、白鷗大学の複数の学部の学生を対象に実施した。対象者数は、新たな学部である発達科学部の1年生40名（すべて女性）、他学部1年生70名（男性30名、女性40名）、他学部2年生以上57名（男性34名、女性23名）、計167名（男性64名、女性103名）である。

## 3. 結果

### (1) 大学卒業後の進路について

大学卒業後の進路についてどの程度決めているかを、5段階でたずねた。結果は、図1のとおり。167名中99名（59%）が「はっきり」「まあ」進路を決めていると答えた。「あまり」「全く」決めていない者は45名（27%）。学部別には、図2のとおり。新学部である発達科学部の1年生は40人中37

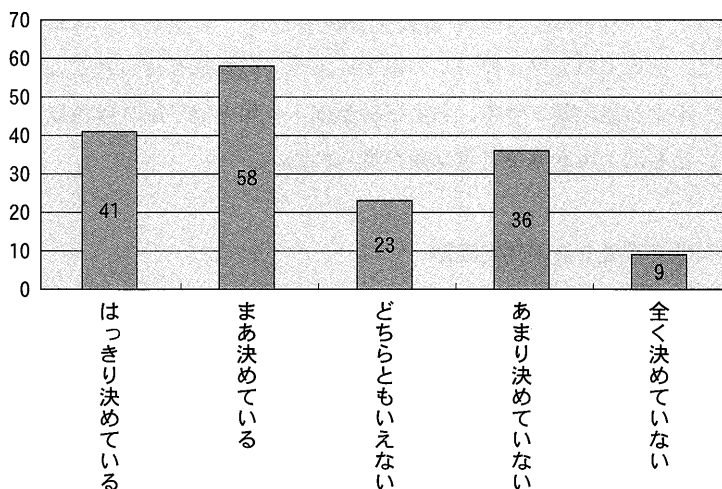


図1：大学卒業後の進路

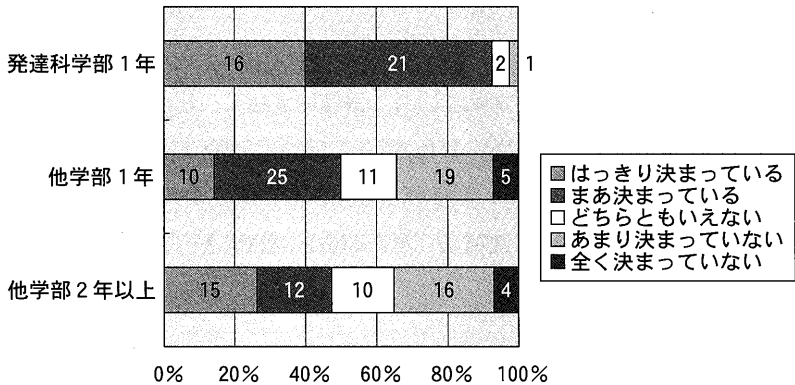


図 2：大学卒業後の進路—学部／学年比較

名、9割以上が卒業後の進路を決めていた。他学部の1年生で進路を決めていたのは、70名中35名、ちょうど5割。また他学部の2年生以上で、進路を決めていたのは57名中27名、こちらも5割弱。新学部の進路決定の高さは、おそらく教育・保育系という学部の性質が大きく影響しているものと思われる。3群の結果について、クラスカル・ウォリスの検定を行ったところ、 $\chi^2=21.391$ 、漸近有意確率.000であり、1%水準で有意な差があった。そこでボンフェローニの修正による多重比較を行ったところ、新学部1年生と他学部1年生、および新学部1年生と他学部2年生以上との間に、ともに1%水準で有意な差が見られた。

(2) 大学卒業後の進路決定時期

大学卒業後の進路を決めている者99名について、その進路を決めたのがいつ頃かたずねた。結果は図3のように、「小学校以前」1名、「小学生」9名、「中学生」14名、「高校1・2年生」19名、「高校3年生」30名、「大学生」あわせて25名、「その他」1名という結果となった。図には前述の調査における短大生の結果もあわせて示しているが、小学校段階から多くの者が進路を決めている短大生と比べると、大学生の決定時期は後ろにず

高校時代に受けた進路指導とその後の進路決定について

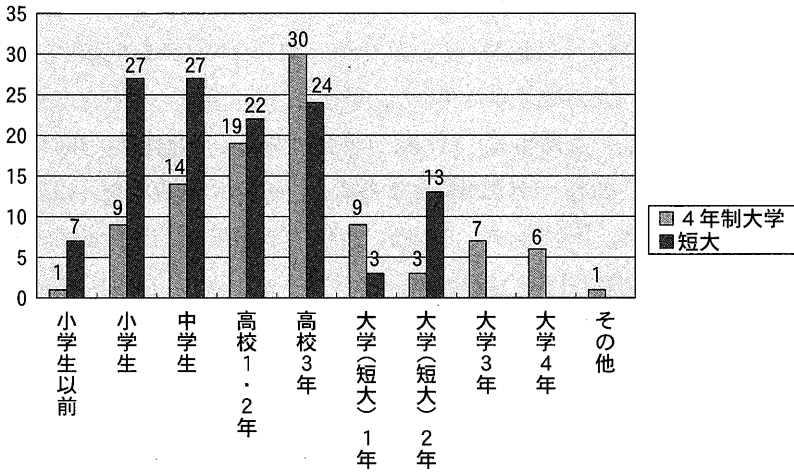


図3：大学卒業後の進路決定時期 (卒業後の進路を決めている者のみ)

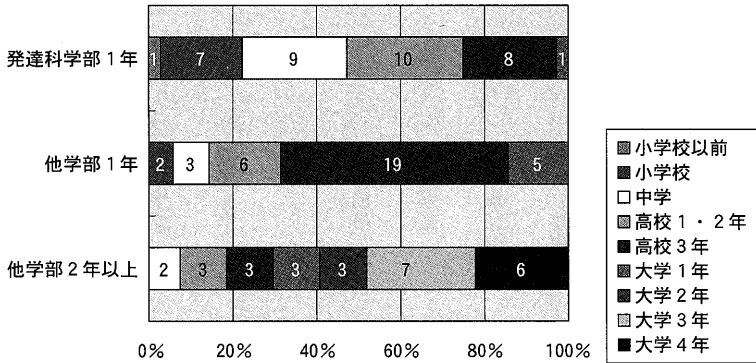


図4：大学卒業後の進路決定時期 学部／学年比較

れこんでおり、高校3年生のときに決定のピークが見られた。また、図4は新学部1年生、他学部1年生、他学部2年生以上の3群それぞれについての結果である。発達科学部では、進路決定者の半数近くが中学生までに決定しており、他群よりも際立って早い段階で決めていることがわかる。

(3) 高校時代に受けた進路指導の内容

高校時代にどのような進路指導を受けたか、11のプログラムを提示して、それぞれ受けたことがあるかたずねた。結果を図5に示す。受けたと答えた者が多い順に、「進路相談」157名、「進路に関する情報提供」136名、「卒業生の講話」75名、「外部講師による講話」66名、「適性検査」64名、「模擬面接」63名、「ボランティア活動」22名、「職場見学」「大学教員による出張授業」とともに21名、「就業体験／インターンシップ」16名、「福祉体験」15名となった。

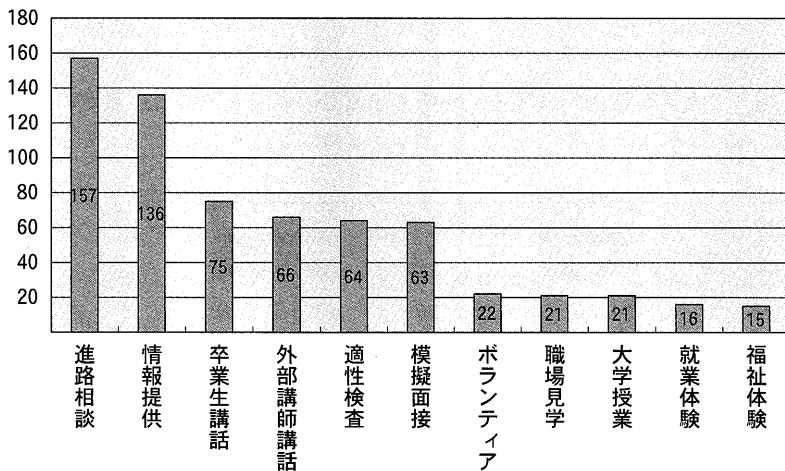


図5：高校時代に受けた進路指導

(4) 高校時代に受けた進路指導が大学進学決定に役立った程度

高校時代に受けた進路指導が、どの程度大学への進学決定に役立ったか、5段階でたずねた。結果は図6のとおり。「とても役立った」25名、「まあ役立った」75名、「どちらともいえない」43名、「あまり役立たなかった」16名、「全く役立たなかった」8名と、「まあ役立った」を頂点とする分布となった。「とても」「まあ」役立ったとした者はあわせて100名、60%で

高校時代に受けた進路指導とその後の進路決定について

あった。3群毎の結果について図7に示したが、クラスカル・ウォリスの検定を行ったところ、 $\chi^2=12.206$ 、漸近有意確率.002で、1%水準で有意な差があったため、ボンフェローニの修正による多重比較を行ったところ、新学部1年生と他学部1年生、および新学部1年生と他学部2年生以上との間に、ともに1%水準で有意な差が見られた。

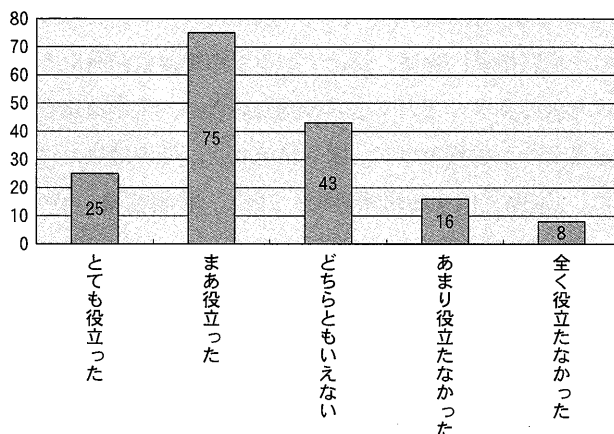


図6：高校時代の進路指導が大学進学決定に役立った程度

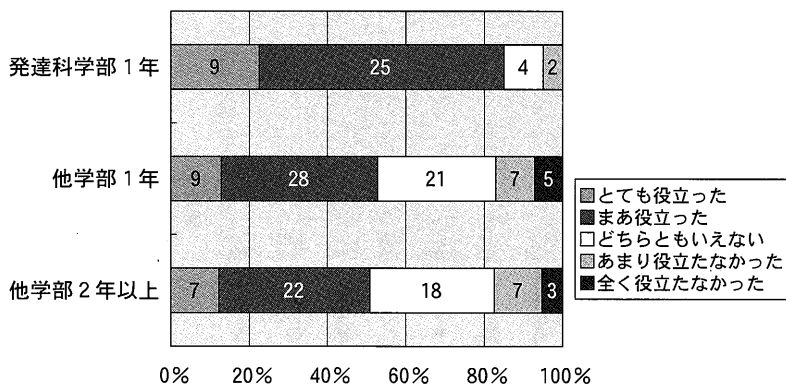


図7：高校の進路指導が大学進学決定に役立った程度 学部/学年比較

(5) 大学進学決定に役立った進路指導の内容

高校時代に受けた進路指導のうちで、大学への進学に役立ったものを答えてもらった。その結果は図8のとおりで、特に多かったのは「進路相談」72名、「進路に関する情報提供」69名、「模擬面接」30名。以下、「外部講師による講話」16名、「卒業生の講話」15名、「適性検査」10名、「職場見学」7名、「就業体験／インターンシップ」6名、「ボランティア活動」5名、「大学教員による出張授業」4名、「福祉体験」3名となった。

それぞれの進路指導内容は、受けている者の絶対数が異なるため、その内容を受けた者のうち、どのぐらいの割合の者が、大学進学を決めるのに役立ったと答えたかを算出して、図9に示した。その結果、役立った割合が多い順に、「進路に関する情報提供」51%、「模擬面接」48%、「進路相談」46%、「就業体験／インターンシップ」38%、「職場見学」33%、「外部講師による講話」24%、「ボランティア活動」23%、「福祉体験」「卒業生の講話」ともに20%、「大学教員による出張授業」19%、「適性検査」16%となった。

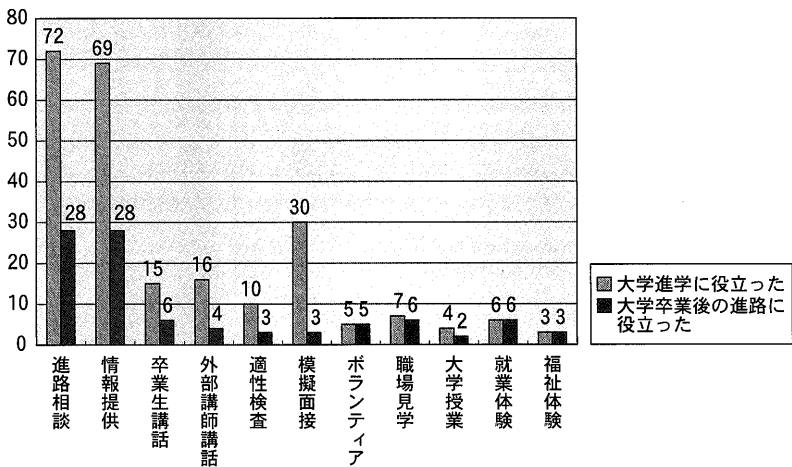


図8：高校時代の進路指導の役立ち



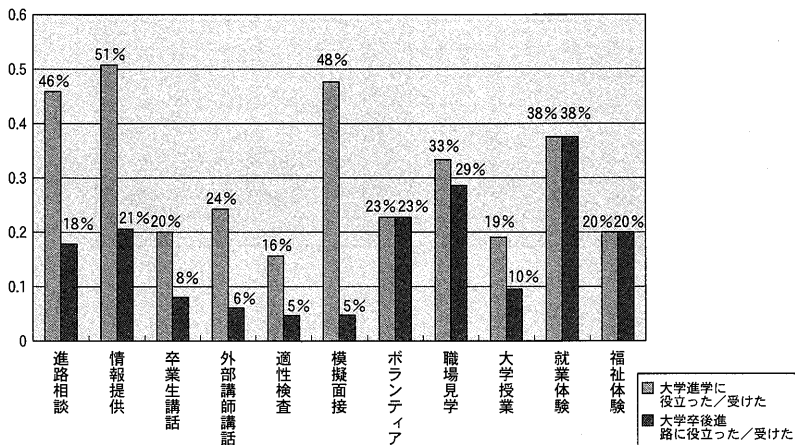


図9：高校時代に受けた進路指導が役立った割合

(6) 高校時代に受けた進路指導が大学卒業後の進路決定に役立った程度

高校時代に受けた進路指導が、どの程度大学卒業後の進路を決定するのに役立ったか、5段階でたずねた。結果は図10のとおり。一見して、大学進学決定に役立った程度の度数分布であった図6よりも右側に、すなわち「役に立たなかった」方向へとシフトしていることがわかる。「とても役立った」3名、「まあ役立った」38名、「どちらともいえない」72名、「あまり役に立たなかった」34名、「全く役に立たなかった」20名と、「どちらともいえない」を頂点とする分布であった。

高校での進路指導が大学卒業後の進路を選択するのに役立ったとした者は、「とても」「まあ」をあわせて41名、全体の25%。先に述べた、大学進学に役立ったとした者の割合60%に比して、少ない数字となった。

なお、学部・学年群毎の差異については、図11に示したが、クラスカル・ウォリスの検定を行ったところ、 $\chi^2 = 27.402$ 、漸近有意確率.000で、1%水準で有意な差があった。ボンフェローニの修正による多重比較を行ったところ、新学部1年生と他学部1年生、および新学部1年生と他学部2年生以上との間に、ともに1%水準で有意な差が見られた。

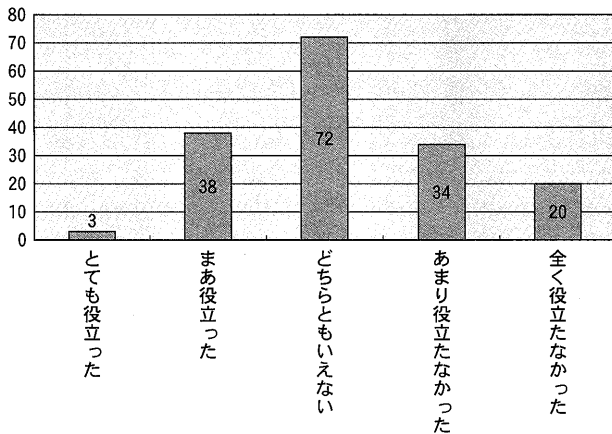


図10：高校時代の進路指導が大学卒業後の進路決定に役立った程度

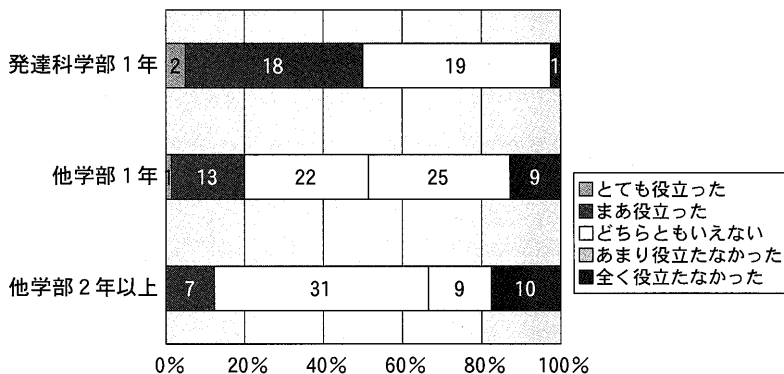


図11：高校の進路指導が大学卒業後の進路決定に役立った程度  
学部/学年比較

(7) 大学卒業後の進路決定に役立った進路指導の内容

高校時代に受けた進路指導のうちで、大学卒業後の進路を決定するのに役立ったものを答えてもらった。その結果は前出の図8のとおりで、多かった順に、「進路相談」「進路に関する情報提供」とともに28名、「卒業生の講

話」「職場見学」「就業体験／インターンシップ」とともに6名、「ボランティア活動」5名、「外部講師による講話」4名、「適性検査」「模擬面接」「福祉体験」とともに3名、「大学教員による出張授業」2名となった。

それぞれの進路指導の内容を受けた者のうち、どのぐらいの者が大学卒業後の進路を決めるのに役立ったと答えたか割合を算出して、前出の図9に示した。その結果、役立った割合が多い順に、「就業体験／インターンシップ」38%、「職場見学」29%、「ボランティア活動」23%、「進路に関する情報提供」21%、「福祉体験」20%、「進路相談」18%、「大学教員による出張授業」10%、「卒業生の講話」8%、「外部講師による講話」6%、「適性検査」「模擬面接」とともに5%となった。上位3つはいずれも体験型の進路指導であり、こうした進路指導が、多くの者に与えられている他の進路指導のプログラム以上に、大学卒業後の進路決定に役立つ割合が高いことが明らかとなった。

#### (8) 高校時代に受けた進路指導の内容についての分類

高校時代に受けた進路指導の内容について、回答傾向の似たものを抽出するため、数量化Ⅲ類による分析を行った。結果は表1のとおり。図12には、成分1と成分2からなる空間上に、各指導内容をプロットした。また表2および図13には、クラスター分析ウォード法による結果とデンドログラムを示したが、これらをあわせてみると、高校時代に受けた進路指導の内容は、「福祉体験」「ボランティア活動」「就業体験／インターンシップ」「職場見学」「大学教員による出張授業」の＜体験型進路指導＞グループ、「進路相談」「進路に関する情報提供」の＜相談型進路指導＞グループ、「卒業生講話」「適性検査」「外部講師による講話」「模擬面接」の＜その他の進路指導＞グループの3群に分かれるようである。

表 1 : 「受けた」内容の数量化Ⅲ類の結果

	固有値	相関係数	全分散に 対する累積比
1	0.2876	0.5363	0.1961
2	0.2280	0.4775	0.3516
3	0.1820	0.4266	0.4757
4	0.1391	0.3730	0.5706
5	0.1303	0.3610	0.6594
6	0.1234	0.3512	0.7435
7	0.1172	0.3424	0.8234
8	0.1010	0.3177	0.8923
9	0.0960	0.3099	0.9578
10	0.0620	0.2489	1.0000
11	0.0000	0.0001	1.0000

	「受けた」人数	成分 1	成分 2	成分 3	成分 4	成分 5
進路相談	157	-0.3317	0.0440	0.0619	-0.3092	-0.1293
情報提供	136	-0.3489	-0.0095	0.3426	-0.7558	-0.1558
卒業生講話	75	0.4625	-0.3130	0.5180	1.0953	-0.1705
外部講師講話	66	-0.0399	-1.0293	0.4168	-0.6035	0.0320
模擬面接	63	-1.0724	1.2243	-1.1080	0.9362	1.5535
適性検査	64	0.2188	0.0087	-0.0206	1.5300	-1.7175
大学教員授業	21	1.1077	-2.8094	0.7699	1.4677	2.6205
就業体験	16	2.3787	-1.1986	-1.2001	-0.8649	1.1128
職場見学	21	1.4721	-0.8047	-4.2588	-0.5913	-0.9161
福祉体験	15	3.5009	3.2715	1.4989	-0.6680	0.7606
ボランティア	22	2.2666	1.0672	0.1332	0.1572	0.1283

表 2 : 「受けた」進路指導内容のクラスター分析（ワード法）結果

## クラスター凝集経過工程

段階	結合されたクラスター		係数	クラスター初出の段階		次の段階
	クラスター1	クラスター2		クラスター1	クラスター2	
1	10	11	9.5	0	0	4
2	8	9	20.0	0	0	3
3	7	8	34.2	0	2	4
4	7	10	52.0	3	1	9
5	1	2	70.5	0	0	10
6	3	6	102.0	0	0	7
7	3	4	136.5	6	0	8
8	3	5	179.5	7	0	9
9	3	7	241.4	8	4	10
10	1	3	371.1	5	9	0

項目番号	「受けた」内容
1	進路相談
2	情報提供
3	卒業生講話
4	外部講師講話
5	模擬面接
6	適性検査
7	大学教員出張授業
8	就業体験
9	職場見学
10	福祉体験
11	ボランティア

高校時代に受けた進路指導とその後の進路決定について

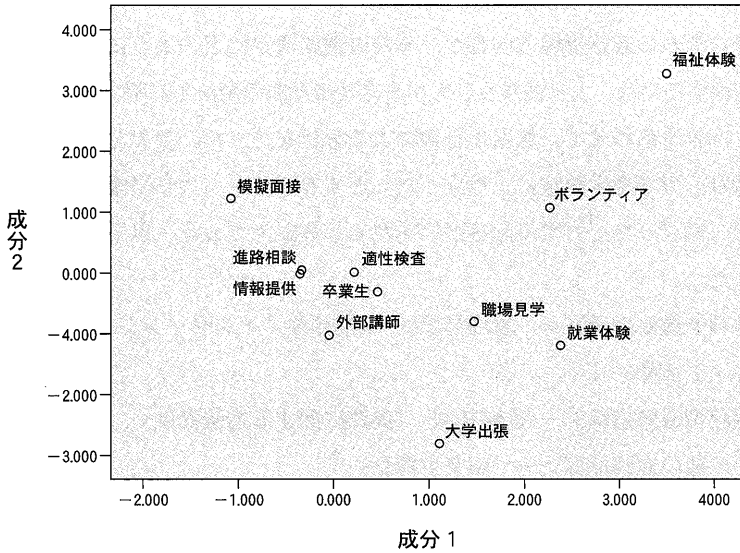


図12：数量化Ⅲ類による「受けた」進路指導内容の散布図

\*\*\*\*\* HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS \*\*\*\*\*

Dendrogram using Ward Method

Rescaled Distance Cluster Combine

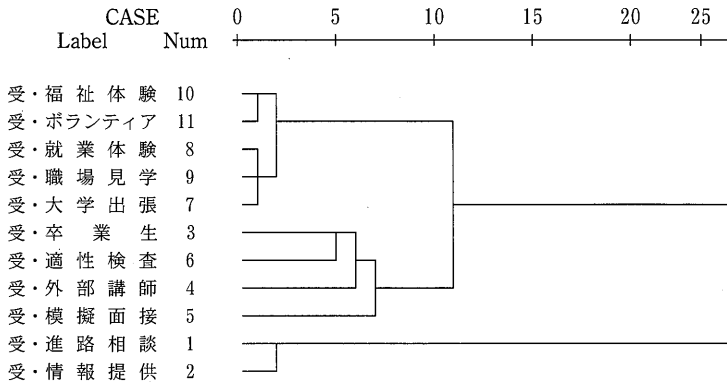


図13：「受けた」進路指導内容のクラスター分析（ウォード法）によるデンドログラム

(9) 各進路指導の内容が実際どう役立ったか

それぞれの進路指導の内容が、実際の進路決定にどのように役立ったかを把握するため、大学進学及び大学卒業後の進路の両決定に関する「役立った」回答をあわせて、数量化Ⅲ類による分析を行った。なお分析に用いた項目は、大学進学決定に「役立った」とする回答と、大学卒業後の進路決定に「役立った」とする回答がいずれも5名以上だった、以下の項目に限定した。

＜体験型進路指導＞—「職場見学」「就業体験／インターンシップ」「ボランティア活動」

＜相談型進路指導＞—「進路相談」「進路に関する情報提供」

＜その他の進路指導＞—「卒業生講話」

ちなみに＜体験型進路指導＞の各内容は、結果(7)で大学卒業後の進路決定に役立つ割合の高い項目として指摘したものと一致している。

結果は表3および図14のような結果となった。クラスター分析ウオード法による結果とデンドログラムを示す表4および図15とあわせて分類すると、＜相談型進路指導＞—大学進学への役立ち、＜相談型進路指導＞—大学卒業後の進路への役立ち、＜体験型進路指導＞+＜その他の進路指導＞—両進路への役立ち、の3群に分かれる結果となった。

表3：大学進学および大学卒業後の進路決定に「役立った」内容の数量化Ⅲ類の結果

	固有値	相関係数	全分散に対する累積比
1	0.5125	0.7159	0.2270
2	0.3863	0.6215	0.3981
3	0.2773	0.5266	0.5209
4	0.2459	0.4959	0.6298
5	0.2123	0.4608	0.7239
6	0.1652	0.4064	0.7970
7	0.1504	0.3879	0.8637
8	0.1322	0.3635	0.9222
9	0.0884	0.2974	0.9614
10	0.0607	0.2463	0.9882
11	0.0266	0.1632	1.0000
12	0.0000	0.0001	1.0000

	「役立った」人数	成分1	成分2	成分3	成分4	成分5
進学・進路相談	72	-0.4153	-0.4606	-0.4037	0.7560	-0.4271
進学・情報提供	69	-0.2592	-0.3024	-0.0917	-0.9188	0.6163
進学・卒業生	15	1.0265	2.6025	-1.8170	0.0723	0.3962
進学・就業体験	6	3.3172	-0.7269	-0.4131	-0.8375	-2.9569
進学・職場見学	7	2.5708	-0.6498	0.8799	1.2135	2.3213
進学・ボランティア	5	2.2854	-0.7124	0.9928	1.4033	2.5581
就職・進路相談	28	-0.3178	0.6626	1.3273	0.1100	-0.6963
就職・情報提供	28	-0.3496	0.9891	1.5963	-0.0458	-0.3433
就職・卒業生	6	0.6638	2.5652	-0.2210	0.2897	0.2108
就職・就業体験	6	3.9677	-0.5965	-0.0196	-0.7498	-2.6353
就職・職場見学	6	3.6849	-0.2941	1.0114	-0.3179	1.1628
就職・ボランティア	5	2.9929	0.6095	0.7184	0.5848	0.3434

表4：大学進学および大学卒業後の進路決定に「役立った」進路指導内容のクラスター分析(ウォード法)結果

クラスター凝集経過工程

段階	結合されたクラスター		係数	クラスター初出の段階		次の段階
	クラスター1	クラスター2		クラスター1	クラスター2	
1	4	10	1.0	0	0	6
2	6	12	3.0	0	0	4
3	5	11	5.5	0	0	4
4	5	6	9.8	3	2	6
5	3	9	14.3	0	0	8
6	4	5	19.0	1	4	8
7	7	8	27.0	0	0	10
8	3	4	39.8	5	6	10
9	1	2	60.3	0	0	11
10	3	7	93.7	8	7	11
11	1	3	171.1	9	10	0

項目番号	「役立った」内容
1	進学・進路相談
2	進学・情報提供
3	進学・卒業生講話
4	進学・就業体験
5	進学・職場体験
6	進学・ボランティア
7	就職・進路相談
8	就職・情報提供
9	就職・卒業生講話
10	就職・就業体験
11	就職・職場体験
12	就職・ボランティア

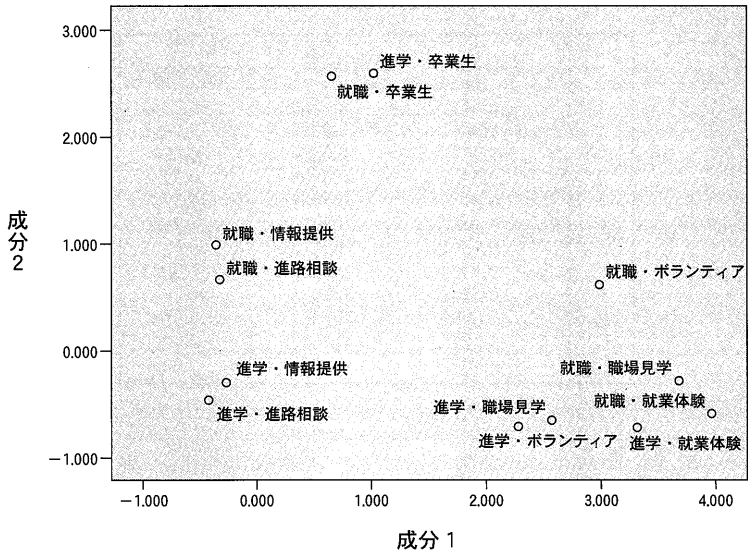


図14：数量化Ⅲ類による、大学進学および大学卒業後の進路決定に「役立った」進路指導内容の散布図

\*\*\*\*\* HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS \*\*\*\*\*

Dendrogram using Ward Method

Rescaled Distance Cluster Combine

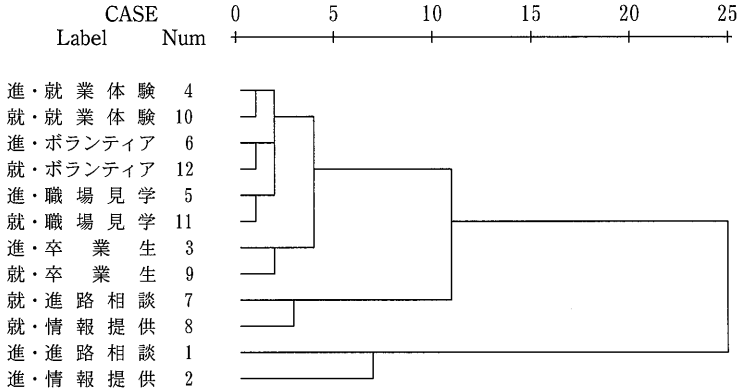


図15：大学進学および大学卒業後の進路決定に「役立った」進路指導内容のクラスター分析(ウォード法)によるデンドログラム



## 4. 考察

### (1) 新学部の特徴について

新学部である発達科学部の学生は、1学年で約300名。そのうち40名が今回の調査対象であり、また全て女性という偏った構成でもあるため、今回の結果が新学部の学生の特徴をそのまま表しているわけではない。しかし、おおよその傾向をつかむことはできるであろう。

他学部の1年生、および2年生以上の学生と比較すると、その特徴がより明確になる。まず新学部の学生群は、いずれの群にも比して、大学卒業後の進路を明確に決めており、今回対象者の9割以上が、「はっきり」「まあ」進路を決めていると答えた。他群の進路決定者がいずれも5割程度であるのに比べると、その決定度の高さは際立っている。また新学部の群では、半数近くが中学までに将来の進路を決定しているという結果となった。これは、図3に示した幼児教育専攻短大生の結果と似ている。さらに、高校で受けた進路指導が、大学進学および大学卒業後の進路決定に役立ったとする者が、新学部の群では他群に比べて多かった。

新学部である発達科学部は、前述のように教育・保育系の学部であり、入学時点で将来の進路を決めている者が多いことはある程度予想されることだが、それでも進路決定者9割という数字と、かなり早い段階での進路決定は、特筆すべきことといえよう。とりわけ中学までに進路を決めていた半数近くの者にとっては、高校での進路指導が自分の将来の進路と関係づけられて経験されることになり、自分の将来のための大学・学部選択という視点から、大学進学にも役立てることができたと考えられる。

### (2) 高校時代に受けた進路指導の内容とその役立ち

大学生にとって、高校時代は将来の進路を決定するための重要な時期だったようである。とりわけ一般の学部では、こうした傾向が強い。図4によれば、すでに将来の進路を決めている他学部1年生の群では、実に7割以

上 (35人中25人) が高校時代に進路を決めている。それでは高校時代、実際に受けている進路指導の内容は、どのようなものだろう。「進路相談」や「進路に関する情報提供」といった<相談型進路指導>は、全体で8割以上の者が受けている。反面、「ボランティア活動」「職場見学」「大学教員による出張授業」「就業体験/インターンシップ」「福祉体験」の<体験型進路指導>の経験率は軒並み低調で、最も多い「ボランティア活動」でも22名、13%の経験率にすぎなかった。また、「卒業生講話」「外部講師による講話」「適性検査」「模擬面接」の<その他の進路指導>は、いずれも4割前後の経験率であった。このように、先に分類された進路指導の内容のグループは、高校時代の経験率の面で<高>、<低>、<中>と、それぞれ特徴を表していることがわかる。

実際の進路指導は、どの程度役に立ったと考えられているか。図6および図9を見ると、進学先の大学を決めるのには「ある程度役に立った」が、大学卒業後の進路決定に関しては「どちらともいえない」というのが、おおよその傾向といえる。

それぞれの具体的な進路指導の内容が、大学進学、あるいは将来の進路決定に役立ったかについてたずねた結果も、興味深いものとなった。大学進学に関しては、それぞれの指導を経験した者のうち、役に立ったと答えた者の割合が多い順に、「進路に関する情報提供」「模擬面接」「進路相談」「就業体験/インターンシップ」「職場見学」の順となった。特に「模擬面接」は、大学受験で面接試験に臨む者にとっては、具体的なスキルを学べるプログラムとして「役立った」とする回答が多かったと思われる。「職場見学」や「就業体験/インターンシップ」は、経験した者自体は少なかったものの、そのうち多くの者が、大学進学先を決めるのに役立ったと答えたことになる。これは、他の<体験型進路指導>である「ボランティア活動」や「福祉体験」にも共通していえることだが、これらの指導は、受けた者は少ないものの、比較的高い割合で大学および将来の進路を決定するのに役立っている。実際、そのプログラムを受けた者の中で、大学卒業後

の進路を決定するのに役立つと答えた者の割合が多かったものは、順に「就業体験／インターンシップ」「職場見学」「ボランティア活動」「進路に関する情報提供」「福祉体験」と、上位5つのうち4つまでを＜体験型進路指導＞が占めている。高校生にとってリアルな体験を伴って強い印象を形成するこれらのプログラムは、自分の将来というものを否応なしに意識させる機会となり、そこで自らのキャリア設計の図面を描いた者が、逆算してどの大学・どの学部で何を学ぶか選択する、ということになるのではないだろうか。主要な進路指導プログラムについての、両進路への「役立ち」の面からの数量化Ⅲ類あるいはクラスター分析の結果は、それらが、＜相談型進路指導＞—大学進学への役立ち、＜相談型進路指導＞—大学卒業後の進路への役立ち、＜体験型指導＞＋＜その他の指導＞—両進路への役立ち、の3群に分かれることを示唆している。多くの高校で生徒たちが経験している「進路相談」や「進路に関する情報提供」という＜相談型進路指導＞は、大学進学にとって重要であると同時に、将来の進路決定という視点からも重要な指導となっている。しかし、「職場見学」「就業体験／インターンシップ」「ボランティア活動」といった＜体験型進路指導＞や＜その他＞の指導については、大学進学および将来の進路決定のいずれに関しても、同じような基準でその「役立ち」を感じていることになる。これは先に述べた、高校での体験型進路指導を機に、将来の進路を決定し、逆算して大学を選択するというモデルの存在を間接的に支持する結果であり、生徒の将来展望に基づく進路の自己決定という進路指導の理念が実現している好例といえよう。

残念なことに現在、多くの大学生が経験してきた高校時代の進路指導は、＜相談型進路指導＞や、＜その他の進路指導＞にあたる各種「講話」や「適性検査」「模擬面接」が中心で、高校卒業後の進路に直接役立つものが重視されている反面、将来のキャリア設計に有効な＜体験型進路指導＞は軽視されているといわざるを得ない。ただしあくまでもこれは、高校卒業後ある程度の時間を経た大学生の回答結果であり、現在は改善に向かって

いる可能性もあるが、いずれにせよ今後ますます、高校での進路指導プログラムに関してさらなる改善が望まれるところである。

## 5. おわりに

筆者は今回、教育・保育系の新学部1年生および他学部の複数の学年を対象に、高校時代に受けた進路指導と、大学進学や大学卒業後の進路決定の関係について、さまざまな観点から分析を行った。新学部においては、そこへの入学が卒業後の進路選択に直結する可能性の高い学部の特性もあって、大半の者が早い時点から大学卒業後の進路決定をしていた。また、全対象の分析をとおしても、高校時代の進路指導について、いくつかの重要な点が明らかとなった。とりわけ、進路指導が〈相談型進路指導〉、〈体験型進路指導〉、〈その他の進路指導〉に大別され、それぞれ経験率は〈高〉、〈低〉、〈中〉であること、経験率の低いこの〈体験型進路指導〉が、将来の進路決定と、そこから逆算する形での大学進学に、大いに役立っていることなど、今後の高校での進路指導に関する有益な示唆を含んだ結果となった。

進路指導を取り巻く環境は、この数年で大きく変化している。1999年の初等中等教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の答申の中で、フリーター志向の高まりを受けて、学校教育と職業生活との接続を改善するために、進路指導を「キャリア教育」としてとらえなおす必要性が述べられている。ここではキャリア教育を、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義した上で、「小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」とし、「実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、各学校ごとに目標を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と述べている。これはいわば、戦後くり返し述べられてきた進路指導

の定義に見られる理念を、「キャリア教育」という新たな名の下に、再度徹底しようという動きといえる。そして2003年に発足した、文部科学省・厚生労働省・経済産業省及び内閣府の関係4府省大臣からなる「若者自立・挑戦戦略会議」による「キャリア教育総合計画」（文部科学省、2004 a）の具体的な動きとして、「若者自立・挑戦プランの強化等キャリア教育の充実」のため、玄田ら（2004）の提言に基づき、2005年度から中学生を中心に、5日以上連続した職場体験をする「キャリア・スタート・ウィーク」が始まっている。高校でも、インターンシップの単位認定が広がっており（文部科学省、2004 b）、行政主導でまさに〈体験型進路指導〉の初等中等教育段階からのシステムティックな展開が始まっている。これら一連の動きは、本調査で指摘された現状の問題点への打開策となるかもしれない。

近い将来、多くの中学高校で〈体験型進路指導〉を重視したキャリア教育がますます充実していくことになるだろう。こうした指導プログラムの持つ強い影響力は、中高生のキャリア意識を高め、結果として早い段階で将来の進路を決定する者が増加すると思われる。一方で、それぞれの進路に応じた適性や、期待される能力のようなものも厳然として存在するであろう。今後高校では、個々の生徒の実情に応じて、現実的な視点とすり合わせながら、生徒たちのキャリア意識の芽をいかに育て、進路についての自己決定能力を高めていくかが重要な課題となる。

そして大学や専門学校など高等教育の場では、学生の将来のキャリアにつながる資格取得や能力育成を視野に入れた教育の実践が重要なのもちろんのこと、拙速な進路決定をしたがゆえに、大学や専門学校入学後に進路変更を希望する学生に対しても、彼らの発達段階で、自ら新たなキャリアの設計を可能にさせるような進路指導プログラムの確立と、変化に柔軟に対応できるシステムの構築—複数の教育機関の連携が必須であろうが—とが、いっそう求められることとなろう。

## 文献

- 藤本喜八 (1987) : 「進路指導の定義について」 進路指導研究 8 pp.37-39
- 藤田晃之 (2001) : 「進路指導の現代的意義」 吉田辰雄編 21世紀の進路指導事典  
プレーン出版 pp47-54.
- 玄田有史・岡田大作 (2004) : 「若年就業対策としての『14歳の就業体験』支援」  
内閣府経済社会総合研究所
- 伊東孝郎 (2005) : 「高校時代に受けた進路指導と大学卒業後の進路決定について」  
白鷗短大論集29(2)
- 厚生労働省 (2004) : 「2004年版労働経済の分析」(労働経済白書)
- 文部科学省(2004 a) : 「『若者自立・挑戦プラン』(キャリア教育総合計画)の推進」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/wakamono/](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/wakamono/)
- 文部科学省 (2004b) : 「高等学校教育の改革に関する推進状況」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/2004/](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/2004/)
- 初等中等教育審議会 (1999) : 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」